

## 海軍の広報を担当した肝付兼行

柴崎 力栄

知的財産学部 知的財産学科

(2010年9月30日受理)

KIMOTSUKI Kaneyuki, a public relations expert of IJN

by

Rikiei SHIBASAKI

Department of Intellectual Property,

Faculty of Intellectual Property

(Manuscript received September 30, 2010)

### Abstract

KIMOTSUKI Kaneyuki (肝付兼行) was the director of Hydrographic Department (水路部) of the Imperial Japanese Navy (IJN) from 1888 to 1905, excluding one and half years just before the First Sino-Japanese War (日清戦争). During his absence, he secretly devoted himself to a nautical survey of the southwestern coast of Japan. The area was expected to become an oceanic theater in a war against China. As the head of the department, he had the authority to decide the locations of both commercial and naval ports. This enabled him to gain support more easily in his public relations activities, such as granting interviews to reporters, speaking at local gatherings and contributing writing articles to newspapers and magazines. He also made significant use of Alfred Thayer Mahan's "sea power" theory, which was imported from the United States Navy. His originality was in using it in the sphere of public relations as well as naval strategy.

キーワード： 海軍, 広報, 水路部, 海図, 軍港, 港湾, 海上権力

Keyword： Navy, Public Relations, Hydrographic Department, Nautical Chart, Ports Location, Sea Power

## 1. はじめに

19世紀後半、蒸気船による遠隔航路の開設と大陸横断鉄道の建設が、世界規模の交通路を変化させ、国家間の地理上の相互関係にも影響を及ぼした。船舶用無線電信機もレーダーもなく、軍艦も商船も漁船も、無事に航海を終えて帰港すること自体が技術的困難さを伴う課題であった。海洋はフロンティアとしての性格をもち、海洋を越えた国民的発展の言説が影響力をもった。海軍と民間船舶の世界は密接に繋がっていた。海洋国家日本が成立した明治時代から大正初期にかけて、軍と民間の境界領域で活躍した人物を列伝風に描くことを考えている。

先に『近現代日本人物史料情報辞典4』（吉川弘文館、平成23年2月刊）に、肝付兼行、井上敏夫、寺島成信の項を執筆した。井上と寺島については本紀要前号に研究ノートを掲載し、辞典では記述できなかった論証部分を提示した。本号では、同趣旨から肝付を取り上げる。

肝付兼行（きもつきかねゆき、嘉永6年（1853年）～大正11年（1922年））は、初め、北海道開拓使で測量に従事し、明治4年（1871年）、兵部省水路局に出仕。以後、日本沿岸の実地測量を行う。天体観測も担当。明治21年（1888年）～同25年（1892年）、明治27（1894年）～同38年（1905年）、水路部長に在任。海軍外では、大日本教育会・帝国教育会、大日本帝国水難救済会、帝国海事協会、大日本水産会の役員を務めた。日本各地に講演に赴き、海事思想の啓発に務めた。明治39年（1906年）、予備役となり、44年（1911年）、貴族院男爵議員。大正2年（1913年）、築港についての知識を期待され大阪市長に迎えられたが、間もなく辞職した。小笠原長生、佐藤鉄太郎に先立ち、米国アルフレッド・セイヤー・マハンのシーパワー論を紹介した。

肝付に関する研究書はない。肝付に言及した論文に、佐藤英二「東京数学会社説語会における「算数学」と「算術」をめぐる論争」（東京大学大学院教育学研究科紀要35、平成7年）、平間洋一「陸奥海

王国」の建設と海軍一大湊興業を軸として」（政治経済史学370、平成9年）、コヴァルチューク・マリナ「日清戦争期の日本の新聞にみるA・マハンの「シーパワー」論の展開」（大阪大学言語文化学14、平成17年）がある。なお、兼行の父、肝付兼武（きもつきかねたけ、文政6年（1823年）～明治20年（1887年））については、宮地正人「幕末の鹿児島藩と情報収集」（平成8年2月3日黎明館特別講演会講演、黎明館調査研究報告11、平成10年）のうち「五蝦夷地問題と肝付兼武」に言及がある。兼行の職歴が北海道開拓使から始まったことは、父が函館に居住し、兼行もそこで成長したことに関わる。

## 2. 原史料

肝付兼行の手元に残ったはずの書類や来翰など、関係文書については確認できない。関東大震災の際、築地にあった水路部が全焼したため、兼行が退職時に水路部から寄贈された水路図のセットを、子の肝付兼英氏が水路部に寄贈した。現在も「肝付海図」として水路部の後身、海上保安庁海洋情報部に保存されている。海上保安庁水路部『日本水路史』（日本水路協会、昭和46年）編纂には、孫の肝付兼一氏から聞き取りがなされた。国立国会図書館憲政資料室には、樺山資紀関係文書（2通）、斎藤実関係文書（4通）、辻新次関係文書（寄託分、4通）、同（昭和42年撮影マイクロフィルム分、5通）の書翰がある。徳富蘇峰記念塩崎財団には5通の蘇峰宛書翰が残る。「肝付男爵薨去」（大日本水産会機関誌『水産界』473、大正11年）には葬儀出席者が記録されており、晩年の交遊関係を窺うことができる。以下、活動分野ごとに著作、論考、講演、関連組織について記す。なお、特記しないものは国立国会図書館の所蔵である。

## 3. 水路部の業務

自然科学者としての素養が要求されるのが水路部

における業務であった。ハンブリン・スミス著、肝付兼行訳『静重学』（文部省編輯局、明治15年）は力学の教科書、肝付兼行著『風理一斑』（水路部、明治22年）は、海洋風、海上気象の概説書である。著者名が肝付になっていなくても、当時の水路部刊行物は、肝付の仕事の一部として検討する必要がある。水路部の年史としては、『水路部沿革史 明治二至十八年』（大正5年）、『水路部沿革史 自明治十九年至大正十五年』（昭和10年）があるが、どちらも規定・組織の改廃を追ったもので、業務内容に踏み込んだ記述は前掲『日本水路史』を見なければならぬ。

水路業務に関連するものが多い東京地学協会への肝付の寄稿は、前島郁雄編『東京地学協会報告 地学雑誌 総目録』（昭和56年）で検索可能である。さらに最近、社団法人東京地学協会ホームページに『東京地学協会報告』と『地学雑誌』の目次が掲載され、同協会からCD-ROM復刻版が頒布されるようになった。

#### 4. 軍港と商港の立地選定

水路図の作成のため日本各沿岸地域に足跡を残した肝付は、結果として、軍港と商港の立地選定について一次情報をもつ権威者とみなされることになった。肝付兼行述、金谷昭編『鉄道調査委員報告 西比利亞鉄道ニ対スル日本ノ開港場ヲ論ス』（金谷昭、明治25年3月）は、田口卯吉が主宰する経済学協会での講演を収めた小冊子で、将来のシベリア鉄道とニカラグア運河開通に対応した貿易港整備を論じた。同文「シベリア鉄道に対する日本の開港場を論ず」が東邦協会の機関誌『東邦協会報告 第九』（納本日付印から明治25年2月16日に帝国図書館の前身、東京図書館に納本されたことが判る）、および、宮城県図書館が所蔵する兵事新報社刊の週刊『兵事』（54～59、明治24年～25年）に掲載された。この講演に対する地方の反応としては、第一に、京都府立図書館所蔵『日本海港湾調査報告書』（奥付がなく

発行者・発行年不明）が残る。表紙に「以活版代謄写」とあり、肝付の講演の中から京都府に関連する部分を抜き出して印刷、配布したものである。第二に、東奥日報主筆、成田鉄四郎著『陸奥湾之将来』（青森町・太田左馬吉、明治27年）は、ウラジオストクから北米方面への大圏航路に対応した開港場として肝付から大湊が適地と指名された青森県の反応を示す。巻末に、建設途上のシベリア鉄道に関する代表的な論客、大石正巳、肝付兼行、稲垣満次郎の論考の転載が並ぶ。日清戦争後、『肝付大佐演説の要領』（高岡市・高柳精一、明治30年）は、富山県の伏木築港期成同盟会と高岡私立教育会の招きに応じた講演である。東京市区改正委員会編刊『東京湾築港沿革』（明治30年）には、樺山資紀・柳植悦を継ぎ、築港の専門家として同委員会に参加した肝付の姿が窺える。肝付兼行『大阪築港ニ就テ』（大阪市立中央図書館所蔵、大正2年）は、市長就任後の肝付が大阪築港の技術的可能性について語った内容を市役所内部向けに印刷に付し、当初、市史編纂室に保存されたものが、現在は市立図書館に伝わった。なお『新修大阪市史 第六巻』（平成6年）には『大阪朝日新聞』に依拠した市長就任と辞任経緯の記述がある。

#### 5. 大日本教育会・帝国教育会

教育界との関わりは、初代水路部長の柳植悦とともに現在の日本数学会・日本物理学会の前身、東京数学会社の活動に関わった経緯が発端であろう。肝付は、明治16年に発足した大日本教育会では創立時からの会員であった。明治21年から大正期にいたるまで役員等を務め、日清戦争後に帝国教育会に改変された同会で、辻新次会長を支えた。教育会での初講演は、明治19年5月9日の常集会での演説「本邦沿海ノ大勢ヲ知ラシムルノ教科ヲ小学校ニ設クルノ必要ヲ論シ併セテ該書編輯ノ意見ヲ述フ」（大日本教育会雑誌54、明治20年4月）である。この演説は、村上千秋編『雄弁大家教育新演説』（大阪・明昇堂、

明治25年初版・国会図書館蔵，同33年3版・都立中央図書館蔵）に収録され，主要な教育演説として扱われた。肝付は，いまだ放送メディアのない時代に，学校教育や講演旅行を海事思想普及の経路として用いた。府県教育会等での講演も数多いと推測されるが，その解明のためには，系統組織である教育会の支部機関誌を道府県別に追跡する必要がある。

## 6. 在郷軍人への軍事教育

北海道立図書館には，肝付兼行著『海軍戦術一斑』『水泳術と救溺法』『溺死者を蘇生せしむる法と仮死者の治療に関する心得』（雑誌の連載記事を集めて再製本したものなので奥付がなく出版年不明）が図書として登録，所蔵されている。この三点は，会津から琴似兵村に移住し屯田兵最古参の将校だった山田貞介の旧蔵資料「山田文庫」の一部である。月刊『軍事教育会講義録』（東京市麴町区九段・軍事教育会，発行兼編輯者高橋静虎）の複数の号に連載された特定テーマの講義を取り出し，再製本したものである。史料の形態から見れば，図書としてではなく，アーカイブズとして扱うべきものであろう。元の形では，第2号（29年7月3日），第3号（同年8月12日）が和歌山大学附属図書館に，第12号（30年8月27日）が国会図書館に残る。軍事教育会は，在郷軍人を読者とする雑誌『軍事新報』を発行する民間団体である。道立図書館所蔵の三点と対比し，肝付が2号に「各国海軍旗章の説明」を，12号に「海軍戦術一斑（完）」を掲載したことを確認した。残る「水泳術と救溺法」「溺死者を蘇生せしむる法と仮死者の治療に関する心得」は同シリーズの他の失われた号に掲載された記事であったと推測される。

## 7. 海事諸団体

日清戦争後になると，形式上は通信省管船局の外郭団体である日本海員救済会，大日本帝国水難救済会，帝国海事協会は，海軍将官である皇族（有栖川

宮威仁親王）を総裁とし，現役を退いた海軍将校（赤松則良，吉井幸蔵，有地品之允）が会長を務め，海軍の外郭団体の姿を呈した。肝付が関わったのは，水難救済会と海事協会であった。

水難救済会には，明治22年の創立時に樺山資紀海軍次官の判断で，水路部長の肝付が海軍から参画し理事となった。『帝国水難救済会五十年史』（昭和14年），『日本水難救済会一〇〇年史』（平成2年），西牟田崇生著『黎明期の金刀比羅宮と琴陵宥常』（平成16年）にその記述がある。琴陵宥常（ことおかひろつね）は，水難救済会の初代会長となった香川県の金刀比羅宮の宮司であり，西牟田氏の研究は金刀比羅宮に残る史料に拠っている。水難救済会機関誌『海』は明治33～34年，同39～40年の分が残る。水難救済会では，海難救助を実行する救難所，救難組合の設置に際し，東京から会長や理事が現地を訪れ，府県警察幹部とともに地元有力者に協力を求めた。募金組織の面でも，各府県の募金目標を達成すると，総裁や会長が来訪し府県支部の創設大会を行った。前掲『五十年史』『一〇〇年史』で支部創設大会の時期を調べ，大会報道のなかに支部創設経緯の報告演説をさがす。明治41年に支部を創設した山口県の例を，県紙『防長新聞』から追跡した経験から，上記のような調査方法が有効と思われる。

海事協会にも，肝付は，明治32年の創立時から理事として加わった。年史としては，『日本海事協会五十年史』（昭和24年），『日本海事協会七十五年史』（昭和51年），『日本海事協会…その一〇〇年の物語』（平成11年）がある。機関誌は，『海事雑報』から『海事新報』と改題されて続き，国会図書館以外にも数か所に残る。欠号を相互に補いつつ通覧可能である。日露戦争中以降の義勇艦隊建設基金を募った時期の海事協会には，教育界や国民世論への働きかけ，一国の海洋活動に関わる基盤構築への意図が存在した。

## 8. 海権論というイデオロギー

その意図を支えた理論が、一国の発展をその海洋支配力との関係で捉えたマハンのシーパワー論であった。肝付のマハン紹介者としての初登場は、「海上の権力 肝付海軍大佐の意見」（国民新聞明治27年10月24日～11月1日、8回連載）である。「二十世紀の軍事（肝付兼行氏談）」（読売新聞明治33年1月2, 3, 4日連載）が典型的な講話内容を示す。速記者、小野田亮正著『現代名士の演説振』（明治41年）は、肝付「男の御得意の講話は、マハム氏の『海上権力史論』である」「三四年前までは、日本全国到る所の講話が、大抵は此『海上権力史論』で持切つて居た」と評した。シーパワー論は海上権力論と訳され、さらに海権論と短縮されて普及した。なお研究史上、明治期の日本海軍がマハン思想を啓蒙や広報のコンテンツとして援用したことを最初に指摘した研究は、本稿冒頭「1. はじめに」に前掲した平間「陸奥海王国」の建設と海軍」であった。

## 9. 海軍戦略家としての側面

マハン受容には、戦略家としての側面もあった。前掲「海上の権力 肝付海軍大佐の意見」（連載初回）では、陸戦における孫子に比すべき海軍戦略論とマハンの初著『海上権力史論』（原著1890年刊）を評する。前掲『現代名士の演説振』には、肝付の『海上権力史論』にもとづく講話内容は、「マルタ、スエズ、ジブラルタル、を対馬、津軽海峡、台湾海峡と対比」したとする。前掲「二十世紀の軍事（肝付兼行氏談）」（連載初回）にもつぎのような文面が残る。引用に際し句読点を適宜加えた。

東洋に於ける地中海は果して何ぞ。東海、黄海、日本海こそ正しく東洋の地中海にして此海区に主人たる者は以て其制海権を有するを得べきなり。

地中海にジブラルタル、マルタ、蘇士の三大要関あるが如く此海区にも亦自ら三大要関あり。

津軽海峡はジブラルタルに比すべく、対馬島はマルタに対すべく、台湾海峡は実に東洋の蘇士運河にあらずや。

而して英国は地中海の三大要関を占むるが為に地中海の制海権を有するを得るを知らば、此海区に於ける三大要関を犯占せる我帝国が其制海権を領有して東洋の主人公たるべきは殆んど天の命ずる所といふべし。

近業・高橋文雄「明治三十三年艦團部将校作業書」と日露戦争」（軍事史学40-2・3合併号、平成16年）は、明治33年、艦艇等の現場に勤務する尉官クラスに課された対ロシア作戦計画立案の課題答案の分析である。若手将校たちは、マハンによる地中海とカリブ海の地理的対比・類推から学び、日本周辺海域を、上の引用の肝付と同様に把握した。台湾海峡以北、対馬海峡を経て、津軽海峡にいたる海域を戦略封鎖する構想が模範回答であった。肝付は水路部長に在任中、明治29年10月30日に陸軍大学校兵学教官を兼任（退任時期は不明）、また、日露戦争中の37年2月から38年11月まで海軍大学校校長を兼任している。海軍内部における作戦思想面でのマハン受容にも関わっていたと推測される。その詳細の解明は今後の課題である。